

朝鮮人被爆者を「語る」

——韓水山『軍艦島』の場合——

楠田 剛士

1 改題について

韓水山^{ハン・スン}の『軍艦島』(上下、作品社、二〇〇九・一二)は、帯に「注目の歴史遺産に秘められた朝鮮人徴用労働者たちの悲劇。」(上)、「決死の島抜けの後遭遇する長崎原爆の地獄絵。一瞬の閃光に惨殺された無量の人々。」(下)とあるように、朝鮮人労働者と長崎原爆について描かれた小説である。この小説の特徴について長野秀樹は、①植民地政策と原爆における日本の加害性の明確化、②群像劇による韓国・朝鮮人の重層的な描出と、③日本人の重層的な描出、④ユーモラスな表現によるエンターテイメント性と悲恋を描く恋愛小説の側面、の四点を指摘している(長野秀樹「軍艦島」論のためのノート、「長崎純心比較文化学会会報」一五、二〇一一)。

要点をおさえた整理だが、具体的な本文の検討という課題が残る。また、なぜ韓水山はこのような小説を書いたのであろうか。

韓は一九八八年から四年間日本に滞在していたが、この間に朝鮮人労働者と長崎原爆について関心を深めていったという(『西日本新聞』、二〇一〇・二・一七)。このことは、自身が述べるよう

に、「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」代表の岡正治からの影響が大きい。そのことは岡と韓の言葉とを読み比べてみてわかる。

二〇世紀の世界の歴史には、核兵器の威力と、その結果による日本の敗戦、ヒロシマ・ナガサキにおける日本人被爆者の悲惨さが刻みこまれるだけでいいのだろうか。祖国を奪われ、日本の植民地となった朝鮮から数百万に上る朝鮮人労働者が日本に強制連行され、奴隷労働を強要され、あげくの果てにヒロシマ・ナガサキの原爆地獄に投げこまれて、悲惨な原爆死にあわされたことや、多くの朝鮮人被爆者が、現在もなおその被害に闘病生活を続けているという真相については、記録されずじまいであつていいのだろうか。この朝鮮人被爆者の実態を、世界中の人々に周知させるという努力は絶対に必要である」と考える。(岡正治「あとがき」、長崎在日朝鮮人の人権を守る会編著『朝鮮人被爆者—ナガサキからの証言』、社会評論社、一九八九・一二、「」は引用者による補足)

私はここ数年来、長崎の被爆者に関心を抱いて、そのことを書いてきている。(略)／日本によつて強制的に連れてこられた人たちがその場所で、あの火の洗礼、原爆の被害をこうむつたのである。彼らに対する補償と謝罪の責任が全的に日本にある理由の第一歩はここから始まる。単なる被爆者ではないのである。(韓水山『隣りの日本人—韓国からは日本がこう見える』方千秋訳、徳間書店、一九九五・九、二八七頁)

朝鮮人被爆者の存在は日本による強制連行の歴史と切り離すことができないという認識に立った韓の小説は、岡正治らが取り組んだ「朝鮮人被爆者の実態を、世界中の人々に周知させるといふ努力」の流れを汲むものである。

韓は一九九三年から「韓国の『中央日報』に「陽は昇り、陽は沈む」というタイトル」で連載を開始した（韓水山「日本の読者へ」、上、四六八頁）。「陽は昇り、陽は沈む」の題名の由来は不明だが、作中の「山の向こうから陽が昇り、山の向こうに陽が沈む。そんな田舎でも（…）（上、三一五頁）、「書螢^{ヒョウメイ}自身もまた、日が昇っては沈む山の彼方に憧れたり恋い慕うこともなかった」（上、三一五頁）などの記述から推察すると、強制連行・奴隷労働・原爆地獄の対極にある、日々の生活や人間らしい生き方を意味していると思われる。あるいは「陽」を「日本」や「原爆」の隠喩として考えることができるかもしれないが、いずれにせよタイトルからすぐに内容が想像できるものではない。

小説は三年の連載の後に中止され、新しく書き直された。これが『カラス』という題名になり全五巻で出版されたのが二〇〇三年である。さらに『軍艦島』と改題されて上下巻の日本語訳版が出版されたのが二〇〇九年である。日本語版監訳・解説者の川村湊は下巻の「解説」で、改題について次のように説明している。

題名を変えたのは、日本の読者にとつて、「カラス」よりも「軍艦島」のほうがインパクトがあるだろうという監訳者の判断による。「カラス」という題名は、端島炭坑で炭塵にまみれて真っ黒になって働く朝鮮人坑夫たちを形容しているの

と同時に、長崎の原爆被爆の惨状を黒いカラスたちによって象徴的に表現して見せた丸木位里・丸木俊の絵画の大作「原爆の図」シリーズの中の「カラス」（これは、朝鮮人被爆者を描き出している）に依っている。そういう意味では、『カラス』の題も棄てがたいのだが、作品の舞台が主に「軍艦島」と呼ばれる端島炭坑であり、その呼び名が、日本の軍国主義や帝国主義を象徴するものであり、最近は特に近代日本の産業遺産として、世界遺産にも登録しようという運動が盛り上がり、廃墟ブームとして観光地化されているということもあって、注目度も高まるのではないかと期待できるからである。

確かに川村が解説で述べるように、軍艦島の本名である端島に「製鉄のための優良な石炭を産出する」炭坑があったこと、石炭が「日本の製鉄業などの重工業の発展」と深い関係があったこと、鉄が「軍需産業、兵器産業」に重要だったこと、「日本人の成人男子の徴兵・徴用に伴う労働力不足」を補う朝鮮人、中国人の斡旋業務や強制連行があったことを踏まえれば、「軍艦島」が「日本の軍国主義を象徴するもの」であり、「外形と本質とに見合った渾名」として「軍艦島という異名で呼ぶことに積極的な意味を見出す立場がありうる」という主張には説得力がある。石炭、鉄、戦争、植民地主義、そして原爆との結びつきを描き出すところにこの小説の大きな見所があることは疑いない。また、長編翻訳作品を日本で発行・販売したり多くの読者を獲得したりするために、「世界遺産」登録運動や「廃墟ブーム」による「観光地化」といった流行性・話題性を利用することは当然だろう。

しかし、軍艦島という一つの場所が題名に採用され、強く押し出されると、これ以外に描かれる朝鮮半島や長崎の様子が後景に退いてしまう。何より著者が一五年かけて完成させた小説に名づけた『カラス』の意味が見えにくくなる。もつとも著者が了解した上での改題であり、川村湊は翻訳にあたり「原著の主題、原文の意図、その表現の効果などをできる限り損ねないように作業したつもり」で、「万が一、原著、原文の価値や意図を毀損するようなところがあつたとしたら、すべて監訳者の責任」であり著者に謝罪すると予め断っている。本稿の関心は改題の良し悪しを問うことなく、小説の本文理解のために一度、原題の『カラス』に立ち戻るとそこから何が見えてくるのかということにある。

『カラス』という題名は丸木位里・丸木俊が描いた『原爆の凶』第一四部「からす」に由来する。「からす」は被爆死体の上に群れ集まる黒い鴉と白いチマ・チヨゴリを描いた絵である。小沢節子はこの絵を、丸木夫妻の「民衆の戦争の記憶をフオークロアとして表現するという試み」の一つとして位置づけ、「写実的でありながらどこからユーモラスなからすや、チマ・チヨゴリの幻想的な表現にこの作品に注がれた夫妻の熱意を読みとることができると指摘している（小沢節子『原爆の凶』―描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』岩波書店、二〇〇二・七、二二八頁）。

作者の丸木俊は、「屍を放っておいたわたしは、屍にまで差別された朝鮮人被爆者を、なんとしても描かねばなりません。そんな絵を描いたからといって、いままでの罪がゆるされるとは思いません。けれど描かねばなりません。わたしは石牟礼さんの文章に教えられ、大きなヒントを得て、第十四部を「鳥」と名づける

ことにしました」（丸木俊「鳥」、『女絵かきの誕生』朝日新聞社、一九七七・八、二二七―二二八頁）と述べており、絵のモチーフが石牟礼道子の文章に触発されたことを明らかにしている。

もとなつた石牟礼の文章は、『菊とナガサキ』（朝日ジャーナル）一九六八・八・一一、『石牟礼道子全集・不知火』1、藤原書店、二〇〇四・七所収）である。以下は「菊とナガサキ」からの引用だが、丸木俊の文章にも引用されている、ある被爆体験者の証言である。

原爆のおつちやけたあと一番最後まで死骸が残つたのは朝鮮人だつたとよ。日本人は沢山生き残つたが朝鮮人はちつとしか生き残らんじやつたけん、どがんもがんもできん。死体の寄つとる場所で朝鮮人はわかるとさ。生きとるときに寄せられとつたけん。牢屋に入れたごととして。仕事だけ這いも立ちもならんしこさせて。／三菱兵器にも三菱長崎製鋼にも三菱電気にも朝鮮人は来とつたとよ。中国人も連れられて来とつたとよ。／原爆がおつちやけたあと、地の上を歩くもんは足で歩くけん、なかなか長崎に来つけんじやつたが、カラスは一番さきに長崎にきて。カラスは空から飛んでくるけん、うんと来たばい。それからハエも。／それで一番最後まで残つた朝鮮人たちの死骸のあたまの目ん玉ばカラスがきて食うとよ。／どこどこから来たカラスじやつたるか、うんと来とつた。カラスが目ん玉は食いよる。アツアツと思うて見とれば死体が動く。動きよる！と思えば蛆が動きよるとよ。それで日本人も困つたとじゃる。臭かつたけん。

「菊とナガサキ」の本文中では、朝鮮の民族衣装である「チマ・チヨゴリ」の語は直接出てこないが、朝鮮から連れられてきて原爆で亡くなった「朝鮮の女学生」について述べられており、これが絵画のイメージに繋がっていると考えられる。そしてこの丸木夫妻が押し広げたイメージに感銘を受けた一人が韓水山である。

「被爆した朝鮮人の惨状の中に白いチマ・チヨゴリが描かれていたことに感銘を受けた。事実だけでなく、事実の中から立ち上がってくる美しさや悲しみが描かれていたんです。私もそのような小説を書きたいという思いをこめて、夫妻の絵から（原題を）取った」（西日本新聞二〇一〇・二・一七）

韓国で出版された『カラス』の作家後記でも、丸木夫妻の絵を「死骸に食いつくカラスの群れの中に、真白いチマ・チヨゴリ一つが浮かんでいる絵である」（李在錫「私たちの暴力と彼らの暴力」、「原爆文学研究」2、二〇〇三・八より引用）と説明している。丸木夫妻が石牟礼の文章からイメージを広げたチマ・チヨゴリに韓が注目していることがわかる。『軍艦島』でも、朝鮮人被爆者の惨状では鴉と民族衣装のことが書かれている。

原爆に遭った朝鮮人、彼らは母国語で泣き、母国語で叫びた。「アイゴー、アイゴー」と痛がり、「オモニ、オモニ」と母を呼びながら死んでいった。どんな圧制も苦しみも、桎梏の歲月もこの母国語だけは奪い去ることはできなかった。そして救護隊の日本人は「アイゴー、オモニ」と泣き叫ぶ朝

鮮人は決して病院に運ばなかった。朝鮮語を話す者には水も食料も与えなかった。彼らは防空壕でさえ追い出された。／そのようにして遺棄された朝鮮人は街で、崩壊した建物の瓦礫の下や軒下、橋の下や川辺で死んでいった。日本人の差別と蔑視のなかで。／最後まで取り残された死体も朝鮮人だった。一見、日本人と見まごうが、千切れた服から朝鮮服だとわかったり、アイゴー、オモニという呻き声を聞いたりして救護隊は区別していた。／そうやって放置されたまま死んでいった朝鮮人の死体の上に、一羽、二羽と鴉が飛んできた。八月の蒸すような陽射しの下、鴉は腐っていく朝鮮人の死体に真っ黒になって群がった。顔に止まり、皮膚を破り、目玉をついばんだ。朝鮮人は死体になっても差別された。瓦礫と化した市街地で腐り続ける死体。その上を鴉が旋回し、群がり、突つき、噛み千切っていた。鴉が黒々と集まっている所には、必ず死体があった。（下・四六三頁）

これまで見てきた丸木夫妻の絵画や石牟礼の文章が折り重なる光景である。李在錫は「韓水山は「国家」の論理によつて「カラス」の餌になってしまう「個人」を凝視し、ともに苦しんでいる（特に、被爆朝鮮人らは韓国からも日本からも捨てられた存在なのだから）」と指摘している（「私たちの暴力と彼らの暴力」前掲）。確かに鴉が朝鮮人被爆者の「顔に止まり、皮膚を破り、目玉をついばむ」ことは死体をモノ化する身体性の剥奪であり、十分な弔いがなされない「悲惨な人間性抹殺の現場」（李）を描いているといえる。また、小沢節子が「人なつこく稚気あふれる存在であると同

時に、集団となって朝鮮人の死骸を啄むからすに、夫妻は差別と抑圧を心の内奥に抱え込んだ日本の庶民の姿を、そしてその一員としての自分たちの姿をも見たのではないだろうか」（『原爆の図―描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』前掲、二二九頁）と述べていることを援用して、小説の鴉を「差別と抑圧」を抱え込む日本の「自分たち」の姿として読むこともできよう。

しかし、韓の小説で鴉が描かれるのは、被爆後だけではない。被爆以前の炭坑労働の場面においては、朝鮮人坑夫自身が炭塵によって黒く汚れた自らを指して鴉のようになったとも表現されている。朝鮮人被爆者を啄む鴉と、鴉のような朝鮮人坑夫。このことをどう考えればよいのだろうか。本稿では小説『軍艦島』の原題が「カラス」だったことと、原爆と炭坑の双方に関わる鴉が、これ以外の場面でも描かれていることに注目し、鴉のイメージが核と植民地の問題にどのように関わっているのかを考察する。

2 鴉の用例

『軍艦島』における鴉の用例として次の十例を取り上げる。

- 【用例①】 朝鮮人の靈魂としての鴉
- 【用例②】 暴力の現場に隣り合う鴉
- 【用例③】 鴉のように黒い炭坑夫
- 【用例④】 差別対象としての鴉と朝鮮人
- 【用例⑤】 差別される鴉から見下される朝鮮人
- 【用例⑥】 同じ恩知らずである人間と鴉

【用例⑦】 強すぎて敵わない相手としての鴉

【用例⑧】 外面と異なった中身を持つ鴉

【用例⑨】 与えられたものである鴉の黒

【用例⑩】 放置された朝鮮人被爆者の死者を啄む鴉

概ね小説を読み進める中で登場する順番に並べている。一つの用例が他の用例と完全に切り離されているわけではないが、具体的な小説の場面に即して、共通点や違いも含めて細かく検討できるように、右の整理を行った。

小説ではまず【用例①】が確認できる。冒頭、明^{ミヨン}国^{グク}が、軍艦島脱走を計画する泰福^{テボク}と話しながら海を眺めて、次のように考える。

逃げて、この島を抜け出して、生き延びられる保証があるなら俺だつて行きさ。だが無理だ。行きてここを脱出した者など、一人もいやしない。海水で体がばんばんに膨れ、死体になって戻ってきた朝鮮人……船着き場に打ち捨てられ、見ろ、逃亡した奴らのなれの果てはこのざまだと、さらしに者にされたあげく、あの向かいの島に引きずられていつて、火葬場で焼かれるのがオチだ。そして異国の海の亡霊になり、うるさく鳴き喚く鷗のように泣きながらこの海を飛び回るといふのか。そんな言葉が今にも口を突いて出そうになるのを、明国は必死でこらえた。／鷗が一羽鳴きながら去つても、鴉が一羽飛んで来ても、それがみんな朝鮮人の靈魂に思えた。国を亡くした者たちのぼろぼろの魂は故郷にも帰れず、紐でくくりつけられたかのようにここを離れられず、あんなふう

に飛んで来るのだという気がした。(上・八頁)

死体の姿は「船着き場に打ち捨てられ」「さらに者にされたあげく、あの向かいの島に引きずられていって、火葬場で焼かれる」と表現されている。これについては、軍艦島からの脱出を試みる又碩が「土左衛門になろうが鴉の餌になろうが、決めたものはやるしかない」(上・四四九頁)と述べていることも合わせると、水死体は後半に描かれる被爆死体の様子に重ねることができると、

また、島を飛び回る鴉は、軍艦島からの脱走に失敗し、亡くなった朝鮮人の仲間たちの「靈魂」に例えられるが、遊郭の同僚だった吉子キルシヤが自殺したことを嘆く鐘クラッ禾の語りの中にも死者の魂の行方について話題になっている。

吉子が死んでから三日間、錦糸は酔っ払って泣きじゃくった。黄泉への旅立ちに、日本人どもの着物を着て見送らなければならぬと泣いた。朝鮮の女が死んだら、せめて白いチマチヨゴリを着て見送れば魂も浮かばれるのに、そんなチマチヨゴリがあるはずもなく、それが悲しくて酒を飲むでは泣いた。もっと生きてもいい女の子が死んだと、声を上げて泣いた。悪どい奴だけが長生きして、絹のような子が先に逝くと泣いた。対岸の島の火葬場から彼女を焼く煙が昇り出すと、防波堤の上にあぐらを掻いて一升瓶を横に置き、吉子、吉子と叫びながら泣いた。いつそ海に飛び込んで魚になつたらよかったのに。海の底には自分の国、他人の国などないんだから。魚になってあの多島海タドヘの青い海を渡り、浜辺を

泳いでも誰にもわからない。そしたらおまえの魂だけでも故郷に帰れたのに。そう叫びながら泣いた。どうして日本人どもの手で焼かれ、骨壺に入れられて故郷に帰るのかと言つてはまた泣いた。(上・四二二頁)

ここでは死者の魂に関わって「白いチマチヨゴリ」と「魚」が描かれる。朝鮮人女性の靈魂を見送る「白いチマチヨゴリ」は、丸木夫妻の「からす」で描かれたチマチヨゴリが想起される。靈魂としての「魚」は、翼を持つ鴉と同様、海を渡って朝鮮に帰りたいという切実な願いの表れである。いずれも、故郷の「土地を奪われ」(上・三九頁)、生きて帰ることができない無念さに支えられたイメージである。『軍艦島』の最初の場面から、鴉と日本の植民地主義の問題は結びついている。

次に登場するのは【用例②】で、脱出に失敗して殴り殺された三植サムシクや捕まった泰福が島に戻ってきた場面である。脱出者の捜索に駆り出された明国は「島なら鴉がいてもよさそうなものだが、縁起の悪い鴉ばかりやたら多いぜ」(上・一八頁)と独り言をいう。朝鮮人は軍艦島で過酷な労働を強いられたが、鴉はそのような暴力の現場に関わる存在である。実際に、このあと泰福に対する拷問の場面が描かれている。また三植の死体については、「無造作に投げ置かれ、逃亡者のなれの果てはこうなると見せしめにされたあげく、数日かけて腐っていくのである」(上・一九頁)とあり、ここでも被爆死した朝鮮人の姿を予告するような表現がある。

また、徴用の歓送会の場面でも鴉が登場する。歓送会が行われる郡役場の建物には「朝鮮の皇民化政策」(上・七一頁)を示す「国

体明徹、東洋親和」と書かれた旗があり、鴉はその上を飛び去る（上・六九頁）。歓送行事中には「学校の屋根の上で鴉が」「この時とはかり騒々しく鳴き立て」て「飛んでき」く（上・一四五頁）。住吉トネル工事で一緒になった又碩と吉男が歩いているときにも「町の子供たちは朝鮮人を見ると、「センジン、チョーセンジン」とはやしたてながら石を投げ」、「とっとと帰れ。失せやがれ、センジンめ！」と叫ぶ彼らの頭上を鴉が飛んでいた（下・二五五―二五六頁）。故郷や家族との強制的な別れや、子供にまで浸透した差別意識もまた、植民地政策の暴力性を示すものであり、鴉はここでも不吉なものと隣り合っている。

物語の序盤の植民地問題は【用例③】の炭坑にも関わる。「日本国内で必要とする労働力の主要供給源として、朝鮮から労働者を連行する措置」（上・三八頁）により、炭坑や金属鉱山に朝鮮人労働者が動員され、劣悪な労働条件、差別的な待遇で働かされた。明国もその一人だが、「炭塵と汗にまみれた顔」（上・一七頁）をしており、「鴉のいとこみたいな有様で石炭を掘っている奴に娘を嫁がせる親がいるはずねえからな」（上・七九頁）と語る。一柱も「鴉みたいになって石炭を掘り、それでも足りなくて石まで投げてらあ……」（下・一四四頁）と、鴉と我が身を重ねて語っている。また明国のように血縁関係を用いて語るケースは他もあり（又碩「鴉が見たら兄弟だと思って、兄ちゃん、兄ちゃんと寄ってくるのがオチだ」上・三四四頁、明国「まったく鴉が見たら、やれやれうちのお爺さんがやっと帰って来たよ、抱きついてくるだろうよ」上・三七九頁）、この場合は「人なつこく稚気あふれる」（小沢）の鴉が

イメージされる。

用例②の鴉は人間の頭上を飛ぶ不吉な存在であったが、③は人間と重ねられているので①の用法に近い。しかし、①は死者であるが、③では炭坑労働をしている自分自身を指しており、苦しみを生きる朝鮮人労働者と鴉との結びつきが強いものとなっている。その結びつきも、家族のような親しみで語られる一方、自虐的な形でも語られている。後者には、②と結びつく鴉への蔑視が彼らにもあるからだろう。

【用例④】は、そうした差別の視線に関するものである。例えば朝鮮から父を捜しに日本にやってきた吉男は「長崎の六本指がやっている飯場」に滞在しているとき（上・一二六頁）、鴉を見て「ここにやって来た日もたたくさんの鴉を見たことを思い出し」、「いまいましてうに唾を吐」（上・一二九頁）く。

この鴉に唾を吐くという差別行為は、前述②の徴用の歓送会の際、知相を見送る朴氏が「鴉が鳴きながら飛んていった方に向かって」「唾を吐いた」（上・一四五頁）場面にもあり、吉男が登場する他の場面でも言及される。吉男は、三菱の住吉トネル工事で一緒になった又碩と会話するとき「徴用者が働いているのは、たいていこういう所だ。逃げられないようにね。背後は山で、前は一本道。坂道を下って村に出たら、朝鮮人、朝鮮人と村の子供に石を投げられる。俺たちが朝鮮で鴉を見たら、誰もが唾を吐くのと同じだ。ここはそんな所だよ」（下・二三二頁）と語る。日本人の子どもは朝鮮人に向かって石を投げつけ、朝鮮人は鴉に唾を吐くという差別の連鎖の構図が伺える。

しかし【用例⑤】では、鴉は逆に、朝鮮人に唾ならぬ糞を落とす。刑務所に収監され、兵器工場で仕事をさせられる東真が「飛んでいく鴉をぼんやり眺めている」と、「工場の屋根から群れをなして飛び立った一羽が、いきなり東真の目の前に糞を落とした」(下・三三三頁)。「朝鮮人は糞でも食えというつもりか。東真が呆れたように笑った。日本じゃ、鴉まで朝鮮人を見くびりやがる」(下・三三三頁)と、ここでは差別者と被差別者の関係が逆転する。

差別の対象であった者からの思わぬ反応は、炭坑における朝鮮人労働者と黒人捕虜との出会いの場面にもある。朝鮮から徴用された又碩が端島炭坑の寮に入る際、作業服が配られたとき「これじゃ、捕虜同然だ」(上・一八四頁)と呟いたり、黒人捕虜を見た東真に対して知相が「顔の黒いなら黒人だなら、おまえだつてそうだろ。みんな真つ黒じゃないか」(上・二五一頁)といったりするように、朝鮮人労働者と黒人捕虜の外見や境遇には類似性がある。だが、東真から見た黒人捕虜の印象は次のようなものである。

その日、東真は片隅にかたまっている西洋人を見て、これはなんとという怪物どもかと思った。おまけにその真ん中に立っている黒人には、ひと目見ただけで笑いが込み上げた。こいつはそれでも人間か。それでなくとも黒いのに炭塵まで浴びていた。わかるのは血走った目と白い歯だけで、まるでその二つが空間に浮いているようだった。

話しかけた東真に黒人の捕虜が聞いた。

「おまえたちも捕虜か？」

「捕虜？ そうじゃないよ。我々は朝鮮人だよ、朝鮮」

「捕虜だろ？ 日本の捕虜」

「朝鮮人を知らないのか？ コリアン」

黒人が白い歯を見せて笑った。嘘をつくな。そんな顔だった。「捕虜じゃないか。我々どどこが違う。同じじゃないか」

(上・二五二―二五三頁)

日本人から差別される朝鮮人労働者が黒人捕虜を「こいつはそれでも人間か」と笑うのだが、その後続く黒人捕虜との会話では「同じじゃないか」という反応が変える。ここでは、日本人から差別される朝鮮人自身もまた他者への差別意識を内に抱え込んでいることが描かれ、その一方で、同じく日本に囚われた立場の人間同士であることも描かれる。会話はなかつた被差別者同士が会おうこの場面には、そうした出会いを生み出した日本の植民地政策のあり方を問ひ直す契機が含まれている。

用例③では同一性、用例④では差別問題が取り上げられ、用例⑤では差異から再び同一性への問題へと開かれていた。【用例⑥】では、より広く人間と鴉の同一性が指摘される。

吉男は鴉に唾を吐きかけ、苛立ちを表していたが、吉男を世話する「六本指」という男は、吉男に対して「おまえ、ここで鴉をたくさん見ただろ?」、「人間も鴉も同じだ。昔から頭に黒い毛のはえている生き物は、人が親切にしてくれたことを知らねえって話さ。」(上・一三一頁)と語る。頭の黒い毛という見た目の共通性を述べている点では、③の炭塵にまみれの黒さについての用法に似ているが、ここではさらに互いに恩知らずな生き物として結びつけるという、独特のイメージが広がっている。

【用例⑦】も、強者と弱者の關係に鴉が例えられる独特の用法である。泥棒をして捕まったなど様々に噂された徴用工の呉光洙が原因不明の「事故死」をしたことで、若い朝鮮人坑夫たちは勞務係に対する反感を強める。そこに「若禿の孫」という人物が、「世の中、蠅の上には鴉がいるもんだよ」（上・三七一頁）、「齒が立つ相手かどうか、まずそれを計算しろといつてんだよ」（上・三七一頁）と言ひ、勞務係にむやみに抵抗しても勞務係の話が有利である以上、無理な行動はしてはいけないと忠告する。

だが、勞務係から散々虐げられてきた坑夫たちは怒りを鎮めることができない。勞務係から坑夫の取りまとめを任せられた徳三や在聖のように勞務係の言い分に従う者と、又碩のように反抗する者との、「同胞同士」の「いがみ合」（上・三七三頁）いが生じる。その中で、圭哲が介入する。これが【用例⑧】である。圭哲は「いくら鴉が黒いからつて、中身までは黒くはないぜ。勞務係のところに行つて話をつけたい奴は行けばいい。徳三に従つて仕事に行く奴はそうすればいい。それぞれ考えがあるんだから。右往左往することはねえ。自分のしたいようにしようぜ」（上・三七四頁）と、その場をまとめる。外見の黒さが、そのまま内面の黒さを表すとは限らない。たとえ外見が炭塵で黒く汚れようが、もともとは黒い肌をしているわけではない。徴用で二八と一緒になつたある徴用工が、同じ朝鮮人でありながら朝鮮人を連行する吉男について語るように、「いくら鴉が黒いつたつて、肉までは黒くはあるめえ。外面はああでも、朝鮮人は朝鮮人さ。中身まで日本人になるはずがねえ」（下・二二八頁）ということもあるのだ。

朝鮮人という「外面」を日本化し、その「中身」までも日本化しようとしたのが、日本の植民地政策であつた。小説に描かれるそれは、「皇国臣民体操」の強要（上・五四頁）、「各家庭に天照大神を祀る神棚を設置させ、朝夕、拝礼することを強いた」「神棚奉祀」（上・五四頁）、「日本語普及運動」と「朝鮮語使用禁止」（上・五四頁）、「植民地朝鮮の全ての公務員と教師に国民服を着るよう強要」（上・五五頁）、「朝鮮民族固有の姓名制度を廃止し、朝鮮人の姓を日本式の氏（名字）に変える朝鮮抹殺政策」（上・七一―七二頁）等、枚挙に暇がない。体操、神棚、日本語、国民服、日本式の氏という日本人の形式Ⅱ外面を朝鮮人に強要する意味は何か。報国民会の山村は徴用される朝鮮人に向かつて「我々が勤勞報国する道、それは志に熱く燃えるみなさんの心と身体を、内鮮一体の証として捧げることです」（上・七〇―七一頁）と語る。植民地政策は朝鮮人から故郷を奪ひ、「心と身体」を奪つていく。だが、小説で描かれる朝鮮人坑夫たちは過酷な炭坑労働で苦しめながらも、勞務係と鬭争し、島からの脱出を図つてゐる。名もない徴用工の「いくら鴉が黒いつたつて、肉までは黒くはあるめえ。外面はああでも、朝鮮人は朝鮮人さ。中身まで日本人になるはずがねえ」という言葉にある鴉は、日本の植民地化政策に対する朝鮮人の抵抗のイメージとしてとらえることができる。

【用例⑨】は抵抗の手段としての軍艦島脱出に描かれる。徴用工による争議の騒乱の中、又碩と一柱は軍艦島を脱出する。又碩は一柱に「おい、もしかして、おまえは最初から、昨日の夜逃げようと思つていたんじゃないのか？」と問うと、一柱は「もらつたら、ただありがたくもらえばいいんだ。鴉は墨を塗つたから黒

くなつたんじゃねえ、生まれつきだぜ」(下・一六一頁)と答える。

鴉の黒さは生まれつきだが、それを否定的にとらえるのではなく、与えられたものとして肯定的に受け入れれば、その黒さは他の生き物にない独自性を誇ることが出来る。そうした鴉の特徴をあり方が、軍艦島から脱出する千載一遇の好機に重ねられている。

しかし、そのように脱出に成功した者も、長崎の原爆で亡くなつてしまうのがこの小説のラストである。ここで【用例⑩】放置された朝鮮人被爆者の死者を啄む鴉が描かれる。

以上を簡単に整理すると以下のようになる。はじめに見たように、「カラス」というタイトルは丸木夫妻の絵から採られたものだったが、韓の小説はその絵も含む亡くなった朝鮮人を弔うように、霊魂としての鴉をまず描いていた。そして生きて過酷な炭坑労働を行う朝鮮人坑夫と鴉を重ね、二者の関係に見られる差別が問題化されていた。植民地政策の差別性が明らかにされる一方、その差別への抵抗もまた鴉のイメージで表現されていた。小説における鴉は、朝鮮人労働者たちと重なりながら、あるいは離れながら描かれている。

だが、物語の結末では鴉は朝鮮人被爆者の死体を啄む。用例でも確認したように、鴉は朝鮮人を差別する他者であり、日本人も朝鮮人に対する抑圧と収奪を行う。

日本が植民地に求めたものは朝鮮の全てだった。彼らは農民の命そのものである土地や、その土地に含まれる大きな資源、さらにそこで何千年も生きてきた、人々の暮らしそのものま

でも資源とみなして強奪しようとしたからだ。(上・二四四頁)

死体を啄む鴉の群れは、朝鮮人の身体に命を育ててきた土地を奪い、土地で営まれた生活の歴史を奪う日本の植民地主義のありようを表すことになる。しかし『軍艦島』における鴉は、炭塵で汚れ、他者を差別しうる朝鮮人自身でもあった。群れの鴉が自身に似た朝鮮人を啄むように、朝鮮人坑夫同士が争う場面があったが、その争いを生み出すのもまた日本の植民地政策であった。さらに『軍艦島』における鴉は、日本という異国で亡くなった朝鮮人の霊魂であった。それを踏まえて、群れの鴉が被爆死した朝鮮人に集まる様子を、故郷に帰ることができない朝鮮人の霊魂を送ろうとする様子としてとらえるのは、あまりに強引で、誤った読み方だろうか。だが、「九州地方の炭坑に伝わる迷信の一つ」に、炭坑で亡くなった坑夫の霊魂がそのまま坑道に残ってさ迷わないように、「遺体を外に運び出す際、同僚が一斉に一緒に上がろう、上がろうと叫ぶことで、死者の魂も一緒に連れていくという」(上・二二一―二二二頁)話があり、朝鮮人坑夫たちが「俺たちの言葉」で「オルラガジャ!(上がろう)」(上・二二二頁)と叫んでいる場面に引き付けて考えれば、「カラス」／『軍艦島』という小説は、朝鮮人坑夫・朝鮮人被爆者の死者の霊魂を忘却から運び出す言葉として書かれた小説だといえる。

では、被爆した中国人、米兵捕虜、オランダ人捕虜たちの霊魂を運び出す言葉はどこにあるのだろうか。『軍艦島』は核と植民地主義のさらなる問題を提起している。